

# 中高一貫ならではの行事で 学校への帰属意識と クラスの結束力を高める

併設型中高一貫校となつて7年目になる福山市立福山中学校・高校の課題は、学校への帰属意識と生徒の結束だ。学校行事と学年行事により、中入生(内進生)と高入生(外進生)、高校生と中学生とのかかわりを通して自立を促す。

の、今後の躍進に期待をつなぐ好実績を挙げた。

2004年度、100年以上の歴史を持つ福山高校に中学校を併設し、併設型中高一貫校として福山市立福山中学校・高校は再スタートした。難関大合格、進学実績向上を目指し、国公立大80人を目標に掲げた。10年3月に卒業した1期生は、旧帝大を含む国公立大に73人が合格。目標には僅かに届かなかったも

中高一貫校として7年目を迎えた

同校にとって、課題は二つある。一つは、生徒の学校への帰属意識を高めることだ。中学校教務主任の脇祥貴先生は、「本校はまだ地域から進学校としての確固たる信頼を得ていません。中学校の成績上位層の中には、卒業しても福山高校に行かず、他校へ進学する生徒もいます。すべての生徒に福山高校へ進学してもら

えるよう、学校に誇りを持てる指導を行う必要があると考えています」と話す。

もう一つの課題は、中入生と高入生の融和だ。高校にとって学校への求心力を高めることは大きな課題だが、生徒の3割は高校から入学する高入生であり、中入生との融和を促すことが、高1における最大の課題である。高校2学年主任の土井光憲先生は次のように述べる。

「中入生には中1から日々の学習

## 福山市立福山中学校・高校

◎1899年開校の私立女学校が前身。69年に福山市に移管して市立福山高校と校名を変更、2004年度に中学校を併設し中高一貫校となる。校訓は「interaction(共感)・intelligence(知性)・intention(意志)」。部活動では、少林寺拳法部、放送部が全国大会の出場多数。

設立	1899(明治32)年
形態	全日制／普通科／共学
生徒数(1学年)	約200人(中学校は約120人)
10年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、神戸大、鳥取大、岡山大、広島大、山口大、愛媛大など73人が合格。私立大は、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ150人が合格。
住所	〒720-0843 広島県福山市赤坂町赤坂910
電話	084-951-5978
Web Site	<a href="http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/">http://www.edu.city.fukuyama.hiroshima.jp/kou-ichifuku/</a>

や行事を通して培われた結束があります。それが学校に活力を与えるのは事実ですが、高入生にとっては中入生の輪に入りづらい、あるいはそのため本校を敬遠する中学生もいます。この二つの集団をいかに融合させるかが、学校を活性化させる上で重要な鍵だと考えています」

**「中高一貫校に欠かせない「縦軸」「横軸」の視点**

同校は、中高一貫校ならではの特



2日間にわたって行われる一樹祭は、1日目は保護者のみ公開、2日目が一般公開される。写真上は吹奏楽部の演奏会、写真下は中学生の合唱の様子

性を踏まえた行事を行っている。

高校3学年主任の石田光敏先生は次のように話す。

「本校では高1から高入生と中入生という異質の集団が混ざり合うため、中学、高校1年、2年、3年という『縦軸』と共に、クラスの団結という『横軸』も重視しています。行事を通じ、学校への帰属意識を高め、クラスの結束力を強くすることで、生徒の自立心を育てることが出来ると思います」

## クラスの結束力を高める「横軸」の行事

「横軸」をつなぐ起点は、高1の4月に行う2泊3日の宿泊研修だ。

高校生としての心構えや生活習慣、学習の仕方などを徹底的に身に付けさせる研修に、生徒自身が主体的に取り組める行事を取り入れている。研修最終日には、

学年全体で取り

組む行事を生徒自身に企画・実施させる。研修前に各クラスから2人ずつ代表者が集まって内容や実施方法を話し合い、役割分担から必要な道具類の調達まですべて生徒が行う。10年度はクラス対抗長縄跳びが行われ、クラスの結束が試される場となった。

高入生にとって、中入生の行動力や段取りの良さなどは大きな刺激になる。高校1学年主任の松村和司先生は次のように述べる。

「宿泊研修では、集合の様子一つを見ても、中入生の比較的多いクラスは行動が早く、まとまりの良さを感じました。それは高入生の多いクラスも意識しており、自分たちのク

ラスをまとめるにはどうしたら良いか、クラス代表を中心に真剣に考えていました。宿泊研修は、中入生と高入生がそれぞれの違いを認めて、切磋琢磨するきっかけになっていると感じます」

その後の学校生活でも、高入生と中入生が刺激を与え合っている場面はよく見られると、高校2学年担任の真弓祥子先生は話す。

「学校行事の準備をしている生徒の様子を見ていると、段取りの良さや、下校時間を守ろうとする姿勢は、中高一貫校になる前の福山高校の生徒と比べて、格段に良くなっています。行事や部活動などさまざまな場面で、中入生と高入生が互いに良い刺激を受けながら、クラスの結束力を高めると感じます」

高校2、3年生になると、中入生と高入生の差はほとんどなくなる。行事は、中学校、高1と培ってきた結束力を土台に個々の生徒の主体性を高めることに重点が置かれ、LHRや学年集会など、生徒が発表する機会を数多く設けている。特に、2年生で行う学部・学科研究、ライフプラン作成などの進路学習の成果発

表は、主体的な進路選択、学びへの意欲の醸成にもつながっている。

## 学校への帰属意識を高める「縦軸」の行事

学校全体の帰属意識を高める「縦軸」を担う行事は、中高合同で行う体育祭や文化祭だ。

体育祭は、中1〜高3の全生徒が参加する。中1女子から始まり高3男子がアンカーを務める「色別対抗リレー」、中1生が先輩の背中を歩いて進む「川下り」のように、中高生が合同で参加する競技もある。

「中学生にとって高校生から受ける刺激はとても大きなものです。自分も先輩のようになりたいという思いが刺激となり、中学生の成長を促します。また、上級生は、先輩の視線を受けて先輩としての自覚が生まれます。幅広い年齢層の生徒が刺激し合い成長していく仕組みが、本校の行事にはあるのです」(松村先生)

毎年6月に実施される文化祭「一樹祭」は同校最大の行事で、中・高校生の保護者だけでなく、地域の多くの人々が集まるイベントだ。部活動や委員会の発表のほか、学年別に

設定されたテーマに基づき、クラスごとに展示や出し物を企画・実施する。出し物の内容の決定や準備は、すべて生徒主体で行う。

「高2での一樹祭が、生徒にとって『自立』の転換点になっていると



**松村和司** Matsumura Kazushi  
福山市立福山中学校・高校  
教職歴18年。同校に赴任して9年目。高校1学年主任。「生徒にはキラリと光るものを持つてほしい」



**土井光憲** Doi Kouken  
福山市立福山中学校・高校  
教職歴28年。同校に赴任して7年目。高校2学年主任。「生徒の可能性を信じて指導に当たってきたい」



**石田光敏** Ishida Misutoshi  
福山市立福山中学校・高校  
教職歴26年。同校に赴任して6年目。高校3学年主任。「生徒をひきつける授業を心掛けた」



**真弓祥子** Mayumi Sachiko  
福山市立福山中学校・高校  
教職歴12年。同校に赴任して7年目。高校2学年主任。「意志あるところに道は開ける」



**脇祥貴** Waki Yoshitaka  
福山市立福山中学校・高校  
教職歴25年。同校に赴任して8年目。中学校教務主任。「苦難にもめげず、頑張る生徒を育てたい」

思います。生徒の自主的な取り組みに対して、教師は出来るだけ口を出さないようにしています。10年度の一樹祭では、高2の出し物の中に、一般の方々に見せる価値があるのかと疑問に思う出し物もありました。しかし、担任会で検討した結果、生徒が主体的に取り組んでいる姿を見て、勇気を持ってそのまま続行させることに決めました。結果だけではなく過程そのものを評価し、生徒が成長するきっかけにしたいと考えています」（土井先生）

### 決められた枠組みの中で最大限主体性を発揮させる

中学、高校と、行事で鍛えられてきた生徒の中には、3年生になると教師の決めたルールを窮屈と感じる生徒もいる。09年度には一樹祭の運営に関してこんなことがあった。

「中高一貫校に移行した後、教師側でつくった一樹祭の進行方法や内容などのルールに対し、あるクラスの生徒がそれを足かせと感じて『元に戻してほしい』と校長に直談判し

に来ました。しかし、教師が制度を変えた理由を丁寧に説明し、決まりを変更することなく取り組ませました。結果的に、一樹祭に向けた生徒の結束力が高まり、そのクラスの出し物が、その年の一樹祭で最も高い評価を得たのです」（石田先生）

「やると決めた以上、与えられた条件の中でベストを尽くす。行事を通して生徒を自立

に向かわせるためには、教師や学校が壁や枠組みを意図的に用意し、その枠組みの中でいかに活動させるかが必要なのです」（土井先生）

今後の課題は、行事で培った主体性を、自律的な学習に結びつけていく点にある。現在、中学校における家庭学習は平均3時間あるが、高校に

進級すると、その時間は3割ほど減少する。

「単に課題の量を増やすのではなく、生徒が自分に必要な学習内容と量を見極め、主体的に進められるようにすることが、高校での大きな課題です。その際、教師がどの程度かわれば良いのか、常に意識する必要があります」（石田先生）

